325
327

始

新約聖書

一日一節

松本吉味著

325-327

宮内省圖書寮

新約聖書

一日一訓

松本苦味編

發行所
大日本雄辯會

大正
8 1 6
内交

小序

本書は新約聖書中に顯れたる箴言警句を殆ど全部蒐錄せり。されどその選擇に當りては、出來得る限り現代人の思想及び生活はふさはしきもののみを選ぶ事とせり。これ編者が聊か意を用ひしところなり。

本書の文章は、總て從來の新約全書によれども、讀者の便宜のため、文字、句讀點の如きは、

大旨今日行はるるものに改めたり。こは基督教徒以外の人々の讀誦にも便ならしめんための微意に外ならず。

近時人道主義を提唱する者漸く多く、是に關する論議も亦增々盛ならんとする時、その淵源ともいふべき本書の廣く世に行はるるを編者は深く切望して止まず。大方の諸賢の愛誦を待つ所以なり。

編者識。

目次

挿畫

イエス・キリスト像……レオナルド・ヴ・ヴキンチ畫……卷頭
聖なる家族……ミケロ・アンセロ畫……六三
約翰と彼得……デュウレル畫……一二七
誘惑……シェッフフア畫……一八九

レオナルド・ヴィンチ　　イエス・キリスト

一月

一月

一日

古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹が聞きし所なり。されど我なんぢらに告げん。凡そ女を見て色情を起す者は心の中すでに姦淫したるなり。若し右の眼なんぢを罪に陥さば、抉出して之を棄てよ。そは五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるる

よりは勝れり。もし右の手なんぢを罪に陷さば、之を斷りて棄てよ。そは五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるるよりは勝れり。

【馬太傳第五章自第二十七節至第三十節】

二日

愛する者よ、我儕互に相愛すべし。愛は神より出づればなり。おほよそ愛あるものは神によりて生れ、また神を識れるなり。愛なき者は神を識らず。神は卽ち愛なればなり。

【約翰第一書第四章自第七節至第八節】

三日

遠人を持成すことを忘るる勿れ。或人かく爲したれば、知らずして天使を持成せり。

【希伯來書第十三章第二節】

四日

我なんぢに告げん。求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩けよ、然らば啓かるることを得ん。そはすべて求むる者は得、たづぬる者はあひ、門を叩く者は啓かるればなり。

【路加傳第十一章自第九節至第十節】

五日

爾曹は欺かるること勿れ。惡しき交は善き行を害ふなり。

【哥林多前書第十五章第三十三節】

六日

心の貧しき者は幸なり。天國は卽ちその人の物なればなり。悲む者は幸なり。その人は安慰を得べければなり。柔和なる者は幸なり。その人は地を嗣ぐことを得べければなり。饑え渴く如く義を慕ふ者は幸なり。その人は飽くことを得べければなり。矜恤ある者は幸なり。その人は矜恤を得べければ也。心の淸き者は幸なり。その人は神を見ることを得べければなり。和平を求むる者は幸なり。その人は神の子と稱へらる可ければなり。【馬太傳第五章自第三節至第九節】

七日

わが兄弟よ。世なんぢらを憎むとも駭くこと勿れ。われら兄弟を愛するに依り、すでに死を出でて生に入りしことを自ら知る。兄弟を愛せざる者は死の中に居る。凡そ兄弟を憎む者は卽ち人を殺す者なり。凡そ人を殺す者は、窮なき生命その衷にをることなし。こは爾曹の知るところなり。【約翰第一書第三章自第十三節至第十五節】

八日

夜すでにふけて日近付けり。故に我儕暗昧の業を棄てて光明の甲を着るべし。行を正しくして晝あゆむ如くすべし。饗餐醉酒、また奸淫好色、また爭鬪嫉妬に歩むこと勿れ。【羅馬書第十三章自第十二節至第十三節】

九日

口より出づるものは心より出づ。これ人を汚すものなり。そは心より出づる所の悪念、凶殺、姦淫、苟合、盗竊、妄證、謗讒、これらは人を汚すものなり。されども手を洗はずして食ふは人を汚さず。

【馬太傳第十五章自第十八節至第二十節】

十日

イエス彼等に言ひけるは、預言者はその故郷、その親戚、その室家の外に於て尊ばれざることなし。

【馬可傳第六章第四節】

十一日

新しき酒を古き革袋に盛る者あらじ。若し然せば、新しき酒はその袋をはりさき、漏れ出づ。かつ革袋も壊るべし。新しき酒は新しき革袋に盛るべき者ぞ。斯くてこそ兩つながら保つなれ。

【路加傳第五章自第三十六節至第三十八節】

十二日

それ信仰は望むところを疑はず、未だ見ざるところを憑據とするものなり。

【希伯來書第十一章第一節】

十三日

狐は穴あり、天空の鳥は巣あり、されど人の子は枕するところな

し。

十四日

食物によりて神の成せるところを毀つこと勿れ。すべての物みな清し。然れども之を食うて人を礙かする者には惡とならん。肉を食ふ、酒を飲む、何事によらず、爾の兄弟を倒し、或は礙かせ、或は懦弱くするは宜からざるなり。

【馬太傳第八章第二十節】

十五日

總てのことつぶやくことなく、また爭ふこと無くして行ふべし、これ爾曹が玷なく雜なく神の子となり、曲れる、邪なる時代にありて

【羅馬書第十四章自第十九節至第二十一節】

責むべきところなからん爲なり。爾曹はこの時代にありて、光の如く世に顯はれ、生命のことばを保てり。

【腓立比書第二章自第十四節至第十六節】

十六日

なんぢら互に愛を負ふのほか、總ての事を人に負ふこと勿れ。そは人を愛する者は律法を全ふすればなり。

【羅馬書第十三章第八節】

十七日

夫われら馬を己に從はせんとして、その口に轡を置く時は、その全體を馭すべし。舟も亦その形は大きく、且烈しき風に追はるるとも、小さき舵を以て舵子の心の隨に之を廻すなり。斯くの如く、舌も亦小

さきものにして誘ること大いなり。視よ。僅かの火、いかに大いなる林を燃すを。舌は卽ち火、すなはち惡の世界なり。舌は百體の中に備りありて全體を汚し、また全世界を燃すなり。舌の火は地獄より燃え出づ。その樣々の獸、鳥、昆蟲、海にあるもの皆制を受く。また既に人に制せられたり。されど、人たれも舌を制し能はず。乃ち抑へがたき惡にして、死の毒の充てるものなり。【雅各書第三章自第三節至第八節】

十八日

イエスその弟子に言ひけるは、誠に爾曹に告げん。富める者は天國に入ること難し。また爾曹に告げん。富める者の神の國に入るよりは、

駱駝の針の孔を通るは却つて易し。【馬太傳第十九章自第二十三節至第二十四節】

十九日

爾曹みな光の子ども、晝の子どもなり。われら夜につけるもの、暗きにつける者にあらず。されば我儕外の人の眠るが如く眠ることをせず、醒めて慎むべし。眠る者は夜ねぶり、酒に醉ふ者は夜ゐふなり。晝につける我儕は信と愛の胸當をき、救ひの望を冑として慎むべし。【帖撒羅尼迦前書第五章自第五節至第八節】

二十日

昔民の中に僞の預言者ありき。その如く爾曹の中にも僞の師出

でん。彼等は淪亡に至る異端を傳へ、且おのれを贖ふ主を主とせずして、速かなる淪亡を自ら取るべし。また多くの人かれらの好色に效はん。眞の道これに由りて誘謬を受けん。かれら貪る心に由りて造詞を設け、爾曹より利を取らんとす。彼等の審判は昔より定めあれば遲からじ。彼等の淪亡は寢ねず。

【彼得後書第二章自第一節至第三節】

二十一日

我が愛する兄弟よ、人おのおの聽くことを速かにして、語ることを遲くし、怒ることを遲くすべし。そは人の怒は神の義を行ふ事をせざればなり。されば諸〻の汚穢と多くの邪惡を棄て、柔和を以て爾曹その

の心に植ゑたる所の靈魂を救ひ得る詞を受くべし。

【雅各書第一章自第十九節至第二十一節】

二十二日

瞽者なる相手よ、爾曹は蠛を漉出して駱駝を呑むものなり。ああ禍なるかな。僞善なる學者とパリサイの人よ。爾曹杯と盤の外を清くして、內には貪欲と淫欲とを充せり。瞽者なるパリサイの人よ。爾曹まづ杯と盤の內を清くせよ。さらばその外も亦きよまるべし。噫、なんぢら禍なるかな。僞善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆるれども、內は骸骨と樣樣の

汚穢にて充つ。斯くの如く爾曹もまた外は正しく人に見ゆれども、内は僞善と不法にて充つ。

【馬太傳第二十三章自第二十四節至第二十八節】

二十三日

人なんぢの頰の右方を擊たば、亦左方の頰を向けよ。爾の上着を取らば、下着をもこばまざれ。總て爾に求めば之を與へ、爾の物を取らばそれをまたもとむる勿れ。

【路加傳第六章自第二十九節至第三十節】

二十四日

末の世に艱の日きたらん。爾このことを知れ。その日至らば、人はただ己を愛し、貪婪、矜誇、驕傲、詬誶、不孝、恩を忘れ、不潔、不

情、怨を解かず、謗讟、慾を縱ままにし、殘刻、善を好まず、友を賣り、放肆、自負、神よりも佚樂を愛することをせん。彼等は敬虔の貌あれど實は敬虔の德を棄つ。なんぢ斯くの如き者を避くべし。

【提摩太後書第三章自第一節至第五節】

二十五日

凡そ人を捌く所の人よ、爾言ひ逃るべきなし。爾他人を捌くは、正しく己の罪を定むるなり。

【羅馬書第二章第一節】

二十六日

泉の源は一つ穴より甘き水と苦き水を共に出さんや。わが兄弟よ、

無花果の樹橄欖の果を結び、あるひは葡萄の樹無花果の果を結ぶことを得んや。斯くの如く、泉の源鹹水と淡水を共に出すこと能はず。

【雅各書第三章自第十一節至第十二節】

二十七日

犬に聖き物を與ふる勿れ。また豕の前に爾曹の眞珠を投げ與ふる勿れ。恐らくは足にて之を踐み、ふりかへりて爾曹を噬みやぶらん。

【馬太傳第七章第六節】

二十八日

遊女に合ふものは彼女と一つの體になるを知らざるか。そは二人のもの一體となるべし。

【哥林多前書第六章第十六節】

二十九日

兄弟よ、爾曹が中に不信仰なる惡しき心を懷きて、生ける神の前より離れ落つることなからんやう慎むべし。爾曹のうち誰一人罪の誘惑によりて剛愎にならざるやう今日と稱ふるうちに日々たがひに相勸めよ。

【希伯來書第三章自第十二節至第十三節】

三十日

聽くところを慎めよ、爾曹が度るところの量をもて爾曹も度らるべし。聽きたる爾曹にはなほ加へられん。

【馬可傳第四章第二十四節】

三十一日

爾曹は世の光なり。山の上に建てられたる城は隠るることを得ず。燈を燃して斗の下に置く者なし。燭臺に置きて家に在るすべての物を照さん。

【馬太傳第五章自第十四節至第十五節】

二月

二月

一日

なんぢ兄弟の目にある塵を見て、己の目にある梁木を知らざるは何ぞや。如何で己の目にある梁木を見ずして、兄弟に向ひ、兄弟よ、爾の目にある塵を我に取らせよと云ふことを得んや。僞善者よ、先づおのれの目より梁木をとれ。さらば兄弟の目にある塵を取ること明かに

見ゆべし。

【路加傳第六章自第四十一節至第四十二節】

二日

誠に實に我なんぢらに告げん。爾曹は歎き悲み、世は喜ぶべし。爾曹憂ふるならん。されどその憂は變りて喜びとなるべし。女子を產まんとする時は憂ふ。その時至るによりてなり。されど已に生めば、もとの苦みを忘る。世に人の生れたる喜樂によりてなり。

【約翰傳第十六章自第二十節至第二十一節】

三日

なんぢら天空の鳥を見よ。蒔くことなく、刈ることを爲ず、倉に蓄

ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり。爾曹は之よりも大いに勝るるものならずや。爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひてその生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合花は如何にして育つかを思へ。つとめず紡がざるなり。われ爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極みの時だにも、その裝この花の一つに若かざりき。神は今日野に在りて明日爐に投げ入れらるる草をも斯くよそはせ給へば、まして爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ、さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふ勿れ。

【馬太傳第六章自第二十六節至第三十節】

四日

兄弟よ、智慧に於ては嬰兒となる勿れ。惡に於ては嬰兒となれ。智慧に於ては成人となるべし。

【哥林多前書第十四章第二十節】

五日

何事よりも先づたがひに篤く相愛することをすべし。そは愛は多くの罪を掩へばなり。なんぢら互に吝むことなく招待すべし。

【彼得前書第四章自第八節至第九節】

六日

不義なる者は不義なる儘にし、穢き者は穢き儘にし、義なる者は義なる儘にし。聖き者は聖き儘にせよ。

【約翰默示錄第二十二章第十一節】

七日

怒りて罪を犯すこと勿れ。怒りて日の入るまでに至ること勿れ。惡魔に處を得さすること勿れ。竊をする者また竊する勿れ。寧ろ貧しき者に施さんために、勵みて手づから善き工をなすべし。總て汚れたる詞を爾曹の口より出すこと勿れ。唯時に從ひて、人の德を建つべき善き事をいひ、聽く者をして益あらしむべし。

【以弗所書第四章自第二十六節至第二十九節】

八日

爾曹たがひに忍ぶことを爲し、若し人に責むべきことあらば之を恕せ。

【哥羅西書第三章第十三節】

九日

婦女はすべてのこと從ひて、靜かに道を學ぶべし。われ、婦女教へを施すことと、男の上に權を執ることを許さず。只靜かにすべし。そはアダムは前に造られ、エバは後に造られたればなり。アダムは惑されざりしなり。婦女は惑されて、罪に陷れり。然れども、彼女もし信仰と、愛と潔と、謹にをるならば、子を生むことによりて救ひを得べし。

【提摩太前書第二章自第十一節至第十五節】

十日

富める者はその卑くせらるる事を喜樂とせよ。そは花の如く逝ぐべければなり。それ日出でて熱し、草を枯せば、その花落ち、その美しき姿消ゆ。富める者も亦かくの如く、そのなすところ半にして、己まづ亡びん。

【雅各書第一章自第十節至第十一節】

十一日

なんぢらが苦をともに受くるごとく、また安慰をも受くることを我儕は知る。この故に、なんぢらにつき我儕が望むところは堅し。

【哥林多前書第一章第七節】

十二日

小人よ、人に惑さるること勿れ。義を行ふ者は義人なり。卽ち主の義なるが如し。罪を犯す者は惡魔より出づ。そは惡魔は始より罪を犯せばなり。神の子の顯るるは、惡魔の仕業を毀たんが爲なり。凡そ神によりて生るる者は罪を犯さず。そは神の種その衷にあるによる。彼亦罪を犯すこと能はず。そは神によりて生るればなり。是によりて、神の子と惡魔の子とは明かに顯る。凡そ義を行はず、その兄弟を愛せざる者は皆神より出でしにあらず。

【約翰第一書第三章自第七節至第十節】

十三日

肉に從ふ勿れ。唯愛を以てたがひに仕ふることを爲よ。

【加拉太書第五章第十三節】

十四日

爾曹富める者は禍なるかな。既に安樂を受くればなり。爾曹飽ける者は禍なるかな。饑ゑんとすればなり。爾曹いま笑ふ者は禍なるかな。悲み哭かんとすればなり。すべての人なんぢらを譽めなば、爾曹禍なるかな。その先祖が僞の豫言者になしたりしも斯くの如し。

【路加傳第六章自第二十四節至第二十六節】

十五日

それ神の怒は、不義をもて眞理を抑ふる人々のすべての不虔不義に向ひて天より顯る。そは人の知るべき所の事柄は人に顯明にして、既に神これを人に顯し給へばなり。

【羅馬書第一章自第十八節至第十九節】

十六日

それ播者は敎へを蒔くなり。詞の蒔かれて路の傍に落ちしものは、人詞を聽きしとき、直ちサタン來りてその心に蒔かれたる詞を奪ひ取るなり。また礫地に蒔かれたるものは、人詞を聽きしとき、直に喜びて之を受く。されども己に根なきが故、ただ暫時のみ。後道のために患難あるひは迫害に遇ふときは、忽ち礙く者なり。また棘の中に蒔か

れたるものは、人詞を聽けども、この世の心づかひと寶の惑、また樣樣の情欲いり來りて詞を塞ぐにより、終に實を結ばざるものなり。良き地に蒔かれたものは、人詞を聽きて之をうけ、あるひは三十倍、あるひは六十倍、あるひは百倍の實を結ぶものなり。

【馬可傳第四章自第十四節至第二十節】

十七日

その生命を惜む者は之を喪ひ、その生命を惜まざる者は之を保ちて限りなき生命に至るべし。

【約翰傳第十二章第二十五節】

十八日

イエス嬰兒を呼び、かれらの中に立ちて言ひけるは、我まことに爾曹に告げん。もし改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ。されば、凡そこの嬰兒の如く自らへりくだる者は、これ天國に於て大いなる者なり。

【馬太傳第十八章自第二節至第四節】

十九日

なんぢら淫を避けよ。人の總て行ふ罪は身の外にあり。されど淫を行ふ者は己が身を犯すなり。

【哥林多前書第六章第十八節】

二十日

妻なる者よ、爾曹その夫に從ふべし。若し敎へに從はざる夫あらば

敎へによらず、妻の行ひによりて從はん。そは爾曹の敬懼を以て清き行ひをなすを見るによりてなり。爾曹の妝飾は髮を辮み、金を掛け、また衣を着るが如き外面の妝飾にあらず。ただ心の內の隱れたる人、すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て妝飾とすべし。この靈の妝飾は神の前にて價貴きものなり。

【彼得前書第三章自第一節至第四節】

二十一日

聖徒たるに適ふ如く、奸淫および總ての汚れたること、また貪ることを互に言ふことだに爲ること勿れ。淫辭と、浮きたる言と、戲れ言を言ふなかれ。これ宜しからざる事なり。寧ろ謝することをすべし。

二十二日

小子よ、我儕愛するに詞と舌とを以て相愛することなく、行と實とを以てすべし。

【以弗所書第五章自第三節至第四節】

【約翰第一書第三章第十八節】

二十三日

爾曹已に古き人とその行を脱ぎて、新しき人を着たれば、たがひに詐をいふなかれ。この新しき人は愈々新しくなり、人を造りし者の像に從ひて知識に至るなり。

【哥羅西書第三章自第九節至第十節】

輕々しく人に按手する勿れ。人の罪に干ること勿れ。自ら守りて清くすべし。

【提摩太前書第五章第二十二節】

二十五日

爾曹のうち賢くして敏きものは誰なるや。柔和なる智慧を以て善き行ひを彰すべし。されど若し爾曹心の中に苦き嫉と忿爭を懷かば、これ眞理に背くなり。眞理に背きて誇る勿れ。また詐る勿れ。かかる智慧は上より下るにあらず。地につけるもの、情慾につけるもの、惡魔につけるものなり。そは娼嫉と忿爭のあるところには、亂と樣樣の惡しき業とあればなり。されど、上よりの智慧に第一に清く、次に平

和、寛容、柔順、かつ矜恤と善き果みち、人を偏り視ず。また偽りなきものなり。義の果は平和を行ふ者の、平和を以て蒔くによりて結ぶなり。

【雅各書第三章自第十三節至第十八節】

二十六日

それ我儕が受くる暫くの輕き苦みは、極めて大いなる、限りなき、重き榮を我儕に得しむるなり。我儕が顧る所は、見ゆる所のものにあらず。見えざる所のものなり。そは見ゆる所のものは暫くにして、見えざるものは限りなければなり。

【哥林多後書第四章自第十七節至第十八節】

二十七日

それ己の如く爾の隣を愛すべしと言へる此の一つの詞、すべての律法を全ふするなり。なんぢら愼めよ。若したがひに噬み喰はば、恐らくはたがひに滅されん。

【加拉太書第五章自第十四節至第十五節】

二十八日

肉に從ふ者は肉のことを念ひ、靈に從ふ者は靈の事を念ふ。肉の事を念ふは死なり。靈の事を念ふは生なり。安なり。

【羅馬書第八章自第五節至第六節】

二十九日

兄弟よ、終に我これを言はん。おほよそ眞實なること、おほよそ敬

ふべき事、おほよそ正しき事、おほよそ潔き事、おほよそ愛すべき事、おほよそ善き聞えある事、すべて如何なる德、如何なる譽にても、爾曹これを念ふべし。なんぢら我より學びしところ、受けしところ、聞きしところ、見しところを皆おこなへ。さらば平安の神なんぢらと偕ならん。

【腓立比書第四章自第八節至第九節】

三月

三月

一日

蠹くひ銹びくさり、盗人うがちて竊むところの地に寶を蓄ふること勿れ。蠹くひ銹びくさり、盗人穿ちて竊まざるところの天に寶を蓄ふべし。そはなんぢらの寶のあるところに心も亦あるべければなり。

【馬太傳第六章自第十九節至第二十一節】

二日

爾曹いかに思ふや。人もし百匹の羊あらんに、その一匹まよはば、九十九を山に置き、ゆきて迷ひし一つを尋ねざる乎。若したづねて之に遇ばば、我まことに爾曹に告げん。迷はざる九十九の者よりも、猶その一つを喜ばん。

【馬太傳第十八章自第十二節至第十三節】

三日

神の國は人種を地に蒔くが如し。日夜起臥する中に、種はえいでて育てども、その然る故を知らず。それ地は自ら實を結ぶものにして、初には苗、次に穗いで、穗の中に熟したる穀を結ぶ。既に實れば、刈時至るによりて、直に鎌を入れさするなり。

【馬可傳第四章自第二十六節至第二十九節】

四日

我に聽くところの爾曹に告げん。その仇を愛し、爾曹を憎む者を善くし、詛ふ者を祝し、虐遇者の爲に祈禱せよ。

【路加傳第六章自第二十七節至第二十八節】

五日

イエス橄欖山に往けり。夜の明くる頃また聖殿に入りけるが、民みな彼に來りければ、坐りて彼等に敎ふ。爰に姦淫をなせるとき捉へら

れし婦女ありけるが、學者とパリサイの人、これをイエスの許に連れ來り、群集の中に置き言ひけるは、師よ、この婦女は姦淫を爲しをる時、そのまま捉へられし者なり。斯くの如き者を石にて擊殺すべしとモーセ律法の中に命じたり。汝は如何に言ふや。斯く言へるは、イエスを試みて、訴への種を引き出さんと思へるなり。イエス身を屈め、指にて地にもの書けり。彼等が頻りに問ふにより、イエス起きて言ひけるは、爾曹のうち罪なき者まづ彼女を石にて擊つべしと言ひ、また身を屈めて地にもの書けり。彼等これを聞きて、その良心に責められ、年寄をはじめ若き者まで、一人一人に出で往き、唯イエス一人殘

七日

る。婦女は群集の中に立てり。イエス起きて婦女に言ひけるは、婦女よ、爾を訴へし者は何所へ往きしや。爾の罪を定むる者なき乎。婦女言ひけるは、主よ誰もなし。イエス彼女に言ひけるは、我も爾の罪を定めず。再び罪を犯す勿れ。

【約翰傳第八章自第一節至第十一節】

六日

爾曹罪に死ぬべき肉體を王たらしめて、その慾に徇ふ勿れ。また爾曹の肢體を不義の器となして、罪に獻ぐること勿れ。

【羅馬書第六章自第十二節至第十三節】

死よ、爾の刺は安に在るや。陰府よ、爾の勝は安に在るや。

【哥林多前書第十五章第五十五節】

八日

われ言ふ。なんぢら靈によりて歩むべし。さらば肉の慾を成すことなからん。そは肉の願は靈に逆ひ、靈の願は肉に逆ひ、この二つのもの互に相悖る。この故に爾曹好む所の事を爲すを得ず。

【加拉太書第五章自第十六節至第十七節】

九日

爾曹すべての很毒、恚憾、忿怒、喧嚷、謗讟、また總ての惡を己より棄つべし。たがひに仁慈と憐恤あるべし。

【以弗所書第四章自第三十一節至第三十二節】

十日

妻なる者よ、その夫に從ふべし。これは主にある者の爲すべき事なり。夫なる者よ、その妻を愛すべし。苦を以て之をあしらふ勿れ。子たる者よ、爾曹すべての事に親に從ふべし。これ主の喜び給ふ處なり。父なる者よ、爾曹の子を怒らする勿れ。恐らくはその氣餒ゑん。僕なる者よ、すべてのこと肉體につける主人に從ふべし。誠の心を以て神を畏れて從へ。なんぢら何事も人に仕ふるが如くせず、主に仕ふ

る如く、心より之を行ふべし。そは爾曹は主より報賞なる嗣業を受くることを知る者なればなり。

【哥羅西書第三章自第十八節至第二十三節】

十一日

なんぢら聖き接吻を以て、總ての兄弟の安きを問ふべし。

【帖撒羅尼迦前書第五章第二十六節】

十二日

それ衣食あらば之をもて足れりとすべし 富まんことを欲する者は、患難と罟、また人を滅亡と沈淪に溺らすところの愚にして、害あるさまざまの慾に陷るなり。財を慕ふはもろもろの惡しき事の根なり。あ

る人これを慕ひ、迷ひて信仰の道を離れ、多くの苦害をもて自ら己を刺せり。

【提摩太前書第六章自第八節至第十節】

十三日

なんぢ愚かなる辯論と、系圖と、爭鬪と、律法の紛爭を去るべし。これらは益なく、亦空しきものなればなり。

【提多書第三章第九節】

十四日

忍びて試みを受くる者は幸なり。そはこころみを經て、善とせらるる時は、生命の冕を受くべければなり。

【雅各書第一章第十二節】

十五日

我儕の互に相愛すべきは爾曹の始より聞きし處の命令なり。カインに傚ふこと勿れ。彼はかの惡しき者より出でし者にて、その弟を殺せり。何故これを殺せしか、己の行ひしところは惡しく、弟の行ひし處は正しかりしによる。

【約翰第一書第三章自第十一節至第十二節】

十六日

爾曹もし熱心に善を行はば、誰か爾曹を害はん乎。たとひ正しき事の爲に苦しめらるるとも、爾曹は幸なる者なり。人の爾曹を威すを畏るる勿れ。また憂ふる勿れ。

【彼得前書第三章自第十三節至第十四節】

十七日

なんぢ自ら我は富み、且豐かになり、乏しきところなしと言ひて、實は惱めるもの、憐れむべきもの、また貧しく瞽ひ、裸體なるを知らざれば、われ爾に勸めん。なんぢ富をなさんために我より火に燬きたる金を買ひ、また己が裸體の恥のあらはれざらん爲に、白き衣を買ひて纒へ。また見ることを得んために目藥を買ひて目に塗れ。

【約翰默示錄第三章自第十七節至第十八節】

十八日

總て人に爲られんと思ふことは爾曹もまた人にもその如く爲よ。これ律法と預言者なるなり。

【馬太傳第七章第十二節】

十九日

神の國は如何になぞらへ、何の譬へを以て之を喩へん。一粒の芥種のごとし。之を地に蒔く時は、よろづの種より小さけれど、既に蒔きて生え出づれば、よろづの野菜よりは大きく、且巨なる枝を出して、空の鳥その蔭に棲むほどになるなり。【馬可傳第四章自第三十節至第三十二節】

二十日

人を議すること勿れ。さらば爾曹も議せられず。人を罪すること勿れ。さらば爾曹も罪せられず。人を恕せ。さらば爾曹も恕さるべし。人に與へよ。さらば爾曹も與へらるべし。彼等量をよくして、推し入

れ、ゆすり入れ、溢るるまでにして爾曹の懷に入れん。爾曹量る處のその量にてまた人に量らるべし。【路加傳第六章自等三十七節至第三十八節】

二十一日

死の刺は罪なり。罪の力は律法なり。【哥林多前書第十五章第五十六節】

二十二日

それ肉の行は顯著なり。卽ち苟合、汚穢、好色、偶像に仕ふること、巫術、仇恨、爭鬪、妒忌、忿怒、分爭、結黨、異端、娼嫉、兇殺醉酒、放蕩などの如し。これらの事につき、我嘗て爾曹に斯かることをなす者は神の國を嗣ぐべからずと告げしその如く、今また預じめ之

を告ぐ。靈の結ぶところの果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、撙節、かくの如き類を禁ずる律法はある事なし。

【加拉太書第五章自第十九節至第二十三節】

二十三日

なんぢら人の虛言に欺かるること勿れ。神の怒、これらのことによりて悖れる者に至るなり。

【以弗所書第五章第六節】

二十四日

兄弟よ、我儕なんぢらに勸む。妄なる者を儆め、氣餒者を慰め、弱き者を扶け、すべての人に向ひて忍ぶべし。なんぢら愼みて惡を以

て惡に報ゆることなく、常にたがひに善を追ひ、またすべての人にも善を及ぼすべし。常に喜ぶべし。絶えず祈るべし。すべてのこと感謝すべし。

【帖撒羅尼迦前書第五章自第十四節至第十八節】

二十五日

テモテよ、なんぢ託せられし事を守り、妄なる、益なき談、および智識と、僞り稱ふる辯論とを避くべし。ある人、この僞りの智識に從ひて信仰を謬れり。

【提摩太前書第六章自第二十節至第二十一節】

二十六日

淸き人にはすべての物きよく、汚れたる人と不信者には、一つとし

て清き物なし。既に彼等の心と良心ともに汚れたり。彼等自ら神を識ると語れども、その行ひは之に逆る。彼等は惡むべき者なり。從はざる者なり。すべての善き事はとりて棄つべきものなり。

【提多書第二章自第十五節至第十六節】

二十七日

誘はるる者は神われを惡に誘ふと言ふ勿れ。神は惡に誘はれず、亦人をも惡に誘ひ給はず。

【雅各書第一章第十三節】

二十八日

バビロンよ、爾の中に琴をひき、樂を奏し、笛をふき、狐を鳴らす

聲重ねて聞えず、樣々の工人重ねて見えず、磨の音重ねて聞えず、燈の光かさねて輝らず、花婿花嫁の聲かさねて聞えざるべし。そは爾曹の中の商人は地の貴き者なればなり。また萬國の民なんぢの魔術に惑されたればなり。

【約翰默示錄第十八章自第二十二節至第二十三節】

二十九日

窄き門より入れよ。沈淪に至る路は廣く、その門は大いなり。これより入る者多し。命に至る路は窄く、その門は小さし。その路を得るもの稀なり。

【馬太傳第七章自第十三節至第十四節】

三十日

三十一日

なんぢら醒めて正しきを行ふべし。罪を犯す勿れ。

【哥林多前書第十五章第三十四節】

暫は暫の相者をなし得るや。相共に溝壕に陷らざらんや。

【路加傳第六章第三十九節】

四月

聖なる家族　ミケロ・アンゼロ

四月

一日

富める者よ、爾曹既に來らんとする禍害を思ひて哭き叫ぶべし。爾曹の財は朽ち、爾曹の衣は蠹ひ、爾曹の金銀は錆び腐れり。この錆證を爲して爾曹を攻め、且火の如く爾曹の肉を蝕はん。爾曹この末の日にありて、猶寶を蓄ふることをせり。視よ、爾曹がその田を刈らせし

雇人に與へざる値は叫び、その刈りし者の呼聲は既に萬軍の主の耳に入れり。なんぢら地にありて奢り樂み、屠らるる日にありて尚その心を喜ばせり。なんぢら正しき者を罪に定め、且これを殺せり。彼なんぢらを禦がざりき。

【雅各書第五章自第一節至第六節】

二日

兄弟よ、善を行ひて倦むことなかれ。

【帖撒羅尼迦後書第三章第十三節】

三日

我兄弟よ、主およびその大いなる力によりて強くなるべし。爾曹惡魔の奸計を禦がんために神の武具を以て裝ふべし。我儕は血肉と戰

ふにあらず。政治、また權威、またこの世の幽暗を宰る者、また天の所にある惡の靈と戰ふなり。この故に神の武具を取るべし。それ惡しき日に遇ひて仇を禦ぎ、總ての事を成就して立たんためなり。なんぢら立つに誠を帶として腰に結び、正しきを胸當として胸に當て、穩かなる福音の備を靴として足に履き、この外信仰の楯を取るべし。この楯をもて悉く惡しき者の火箭を消すことを得ん。

【以弗所書第六章自第十節至第十六節】

四日

兄弟よ、若しはからずも過に陷る者あらば、爾曹のうち靈に感じ

たる者、柔和なる心をもて之を正すべし。また自らをも顧みよ。恐らくは爾誘はるることあらん。なんぢら互の勞を負へ。斯くしてこそキリストの律法を全ふすべし。

【加拉太書第六章自第一節至第二節】

五日

戒心して貪心を慎めよ。それ人の生命は持物の饒かなるにはよらざるなり。

【路加傳第十二章第十五節】

六日

僞の豫言者を謹めよ。彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども、内は荒き狼なり。

【馬太傳第七章第十五節】

七日

兄弟よ、忍びて主の來るを待つべし。視よ、農夫地の貴き產を得るを望みて、前と後との雨を得るまで永く忍びて之を待てり。爾曹も忍べ、爾の心を堅うせよ。そは主の來り給ふこと近付けばなり。

【雅各書第五章自第七節至第八節】

八日

人もし有ることなくして自ら有りとせば、是みづから欺くなり。各各そのなすところを考へ視よ。斯くせば、誇る基は己にあつて人にあらず。そは人おのおのその荷を負ふべければなり。されど道を敎へら

る者は。道を敎ふる者にすべて有益なる物を分け與ふべし。

【加拉太書第六章自第三節至第六節】

九日

自らを謹めよ。若し兄弟爾に罪を犯さば、之を諫めよ。彼もし悔ひなば、免せ。もし一日に七度罪を爾に犯して、一日に七度爾に向ひ、われ悔ゆと言はば、免すべし。

【路加傳第十七章自第三節至第四節】

十日

生命は糧より優り、身體は衣よりも優れり。【路加傳第十二章第二十三節】

十一日

すべて善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果を結べり。善き樹は惡しき果を結ばず。惡しき樹は善き果を結ぶこと能はざるなり。おほよそ善き果を結ばざる樹は、切られて火に投げ入れられる。この故にその果によりて之を知るべし。

【馬太傳第七章自第十七節至第二十節】

十二日

人惡に誘はるるは己の慾に引かれていざなはるるなり。慾すでに孕みて罪を生み、罪すでに成りて死を生む。わが愛する兄弟よ、自ら欺く勿れ。

【雅各書第一章自第十四節至第十六節】

十三日

善を行ふに臆する勿れ。それ若し倦むことなくば、我儕時に至りて刈り取るべければなり。この故に、若し機會あらばすべての人に善をなすべし。

【加拉太書第六章自第九節至第十節】

十四日

それ律法は聖し。誡も聖く、正しく、且善なり。

【羅馬書第七章第十二節】

十五日

善き人は心の善き庫より善を出し、惡しき人は其惡しき庫より惡しきを出す。そは心に充つるより口に言はるるなり。【路加傳第六章第四十五節】

十六日

人爾に一里の公役を強ひなば之と偕に二里行け。爾に求むる者には與へ、借らんとする者を卻くる勿れ。【馬太傳第五章自第四十一節至第四十二節】

十七日

兄弟よ、爾曹たがひに怨むること勿れ。恐らくは罪に定められん。視よ、捌きする者門の前に立てり。兄弟よ、なんぢら主の名によりて語りし預言者を苦と忍との式とすべし。【雅各書第五章自第九節至第十節】

十八日

善なる者は我すなはちわが肉に居らざるを知る。そは願ふ所われに

あれども善を行ふことを得ざればなり。わが願ふところの善は之を行はず、反つて願はざるところの惡は之を行へり。若しわれ願はざるところを行ふ時は、之を行ふ者は我にあらず。我に居るところの罪なり。この故に我善を行はんと思ふ時に、惡の我にをるこの一の法あるを覺ゆ。そは我うちなる人に就いては神の律法を樂めども、わが肢體の外の法ありて、我心の法と戰ひ、我を虜にして、我肢體の中にをる罪の法に從はするを悟れり。噫われ惱める人なるかな。この死の體より我を救はん者は誰ぞや。

十九日

【羅馬書第七章自第十八節至第二十四節】

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へること有るは、なんぢらが聞きしところなり。されど我なんぢらに告げん。惡に敵すること勿れ。

二十日

【馬太傳第五章自第三十八節至第三十九節】

謹め、守れ。なんぢらの仇なる惡魔、吼ゆる獅子の如く徧行りて呑むべき者を尋ぬ。なんぢら信仰を堅くして之を禦げ。そはなんぢら世にある兄弟の、同じくこの苦みを受くるを知ればなり。

二十一日

【彼得前書第五章自第八節至第九節】

爾いとけなき時の慾を避けて、義と、信と、愛を追ひ求め、また清き心にて主を顧者と和ぐことを追ひ求むべし。愚なる、無學なる辯論を避くべし。そは之より爭競の起るを知ればなり。

【提摩太後書第二章自第二十二節至第二十三節】

爾曹の中の戰鬪と競爭は何處より來りしや。爾曹の百體の中に戰ふ處の慾より來りしにあらずや。爾曹貪れども得ず。殺すことをし、嫉むことをすれども得ること能はず。爾曹競爭と戰鬪せり。爾曹は求めざるによりて得ざるなり。なんぢら求めてなほ得ざるは、爾曹慾の

ために費さんとして、妄に求むるが故なり。姦淫を行ふ男女よ、爾曹世を友とするは、神に仇するなるを知らざらんや。世の友とならん事を思ふ者は神の仇なり。

【雅各書第四章自第一節至第四節】

二十三日

されば善なるもの我を死なしむるか。然らず。死なしむるものは罪なり。罪は善なるものをもて我を死なしむれば、その罪たること顯れ、また誡によりて罪の甚しきことは現るるなり。

【羅馬書第七章第十三節】

二十四日

聽きて行はざる者は、基礎なく家を土の上に建てたる人の如し。横流これを衝つときは、その家ただちに倒れ、その破れまた甚し。

【路加傳第六章第四十九節】

二十五日

爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報償かあらん。税吏も然せざらんや。安否を兄弟にのみ問ふは、人より何の優れたる事かあらん。税吏も然せざらんや。この故に天にいます爾曹の父の全きが如く、爾曹も全くすべし。

【馬太傳第五章自第四十六節至第四十八節】

二十六日

善き事を爲しし者は生を得るに甦り、惡しき事を爲しし者は審判を得るに甦るべし。

【約翰傳第五章第二十九節】

二十七日

人人平和無事なりと言はんとき亡滅忽ちに來らん。妊める婦女にその劬勞の來る如くなるべし。人々絶えて避くることを得じ。されど兄弟よ、爾曹幽暗に居らざれば、その日盜人の來る如く爾曹に來ることなし。

【帖撒羅尼迦前書第五章自第三節至第四節】

二十八日

なんぢら詞を行ふ者となるべし。唯これを聞くのみにして自らを欺

く者となる勿れ。

【雅各書第一章第二十二節】

二十九日

兄弟を憎む者は暗きにをり、暗きに歩みて、その往くところを知らず。これ、その目を暗きに眊さるればなり。

【約翰第一書第二章第十一節】

三十日

假令われもろもろの人の詞、および天使の詞を語るとも、若し愛なくば、鳴銅や、響く鈸の如し。假令われ豫言するの力あり、又すべての奥儀と、すべての學術に達し、また山を移すほどなるすべての信仰ありと雖も、若し愛なくば、數ふるに足らぬものなり。假令われ我

がすべての持物を施し、また焚かるる爲に我が軀を與ふるとも、若し愛なくば、我に益なし。

【哥林多前書第十三章自第一節至第三節】

五　月

五月

一日

なんぢら人に見せん爲に、その正しきを人の前になすことを愼め。

【馬太傳第六章第一節】

二日

それ詞を聞くのみにして之を行はざる者は、鏡に向ひて生れつきの

顔を見る人に似たり。かれ己を照し觀て去り、のち直にその如何なる相貌なりしかを忘る。

【雅各書第一章自第二十三節至第二十四節】

三日

それ信仰と、望と、愛と、この三つのものは常にあるなり。このうち最も大なるものは愛なり。

【哥林多前書第十三章第十三節】

四日

兄弟よ、我儕肉の爲に負ふところありて、肉に從ひ仕ふる者にあらず。若し肉に從ひ仕へなば、死ぬべし。若し靈によりて體の働きを殺さば、生くべし。

【羅馬書第八章自第十二節至第十三節】

五日

されど爾曹今はすべてこれらの惡しき事、および恚憾、忿怒、暴戾を去り、謗讟、醜言を爾曹の口より棄つべし。

【哥羅西書第三章第八節】

六日

兄弟よ、我なんぢらに新しき誡を書き贈るにあらず。卽ち始より爾曹の持てる古き誡なり。この古き誡は、始より爾曹が聞きしところの詞なり。されど我が爾曹に書き贈るところはまた新しき誡なり。この言は、彼に於ても爾曹に於ても眞理なり。そはいま暗昧はやや過ぎて、眞の光照ればなり。

【約翰第一書第二章自第七節至第八節】

七日

爾の首を指して誓ふ勿れ。そは一筋の髪だに、白くする能はざればなり。爾曹ただ然り然り、否々と言へ。それより過ぐるは惡より出づるなり。

【馬太傳第五章自第三十六節至第三十七節】

八日

ああ蝮の裔よ、爾曹惡にして如何に善を言ふことを得んや。それ心に充つるより口に言はるるものなればなり。

【馬太傳第十二章第三十四節】

九日

十

イエス賽錢の箱に向ひて坐し、人々の錢を箱に入るるを見たまひしに、多くの富める者は多く投げ入れたり。一人の貧しき嫠婦きたりてレプタ二つを投げ入る。そは四厘ほどに當れり。イエスその弟子を呼びて彼等に言ひけるは、誠に我なんぢらに告げん。箱に投げ入れしすべての人々よりも、この貧しき嫠婦は多く投げ入れたり。そは彼等は皆その餘れる所を以て入れ、この女はその乏しきところよりその總ての持物、すなはち全業を盡く入れたればなり。

【馬可傳第十二章自第四十一節至第四十四節】

イエスまた人々に言ひけるは、雲の西より起るを見ば、直に雨ふらんと爾曹いふ。果して然り。南より風ふけば、暑からんと爾曹いふ。果して然り。僞善者よ、天地の色象を別つことを知りて、この時を別ち能はざるは何ぞや。また何ぞ自ら公義を審めざる乎。

【路加傳第十二章自第五十四節至第五十七節】

十一日

ユダヤ人とギリシヤ人の隔てなし。そはすべての者の主は唯一つなればなり。

【羅馬書第十章第十二節】

十二日

兄弟よ、我さきに爾曹に語れるとき、靈につける者に語るが如くする能はず。唯肉につける者の如く、亦キリストにをる赤子に語る如くせり。われ爾曹に乳を哺しめて堅き物を與へざりき。爾曹食ふこと能はざればなり。今も猶あたはず。そは爾曹なほ肉につける者なればなり。なんぢらの中に、嫉妬と紛爭あり。これなんぢら肉につきて、人の如く行ふにあらずや。

【哥林多前書第三章自第一節至第三節】

十三日

何事を思ふにも、黨を結び、あるひは空しき譽を求むる心を抱くべからず。各〳〵へりくだりたる心を以て、互に人を己に優れりとせよ。

十四日

神の詞は活きて且力なり。兩刃の劍よりも利く、生と魂、また節節骨髓まで通し剖ち、心の思ひと志を見分くるものなり。

【希伯來書第四章第十二節】

十五日

この故に爾曹すべての怨恨、すべての詭譎、また僞善、娼嫉、およびすべての謗言を棄てて、今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く、爾曹心を養ふ眞の乳を慕ふべし。これによりて、爾曹育ち、救ひに至らん。

【腓立比書第二章自第三節至第四節】

十六日

憐むことをせざる者は、鞫かるる時また憐まるることなからん。矜恤は鞫に勝つなり。

【彼得前書第二章自第一節至第二節】

十七日

凡そ世にあるもの、卽ち肉體の慾、眼の慾、また勢より起る驕傲、それらは皆父より出づるにあらず。世より出づるなり。この世とその慾とは過ぐるものにて、神の旨を行ふものは、限りなく止るなり。

【雅各書第二章第十三節】

【約翰第一書第二章自第十六節至第十七節】

十八日

施濟をなす時、人の崇を得んために、會堂や巷にて僞善者の如く筑を己が前に吹かしむる勿れ。我まことに爾曹に告げん。彼等は既にその報償を得たり。なんぢ施濟をするとき、右の手のなすことを、左の手に知らする勿れ。かくするは、その施濟の隱れんが爲なり。

【馬太傳第六章自第二節至第四節】

十九日

イエス敎へをなせる時、彼等に言ひけるは、長き衣を着て歩き、巷にて人の挨拶、會堂の高坐、筵席の上座を好み、また嫠婦の家を呑み、

僞りて長き祈をする學者を謹めよ。彼等の捌かるること尤も重し。

【馬可傳第十二章自第三十八節至第四十節】

二十日

その頃あつまりたる者の中に、ピラトがガリラヤ人の血をその供物に雜し事をイエスに告ぐる者あり。イエス答へて彼等に言ひけるは、爾曹このガリラヤ人は斯くの如く惱まされし故に、すべてのガリラヤ人よりも勝りて罪ある者と思ふや。我なんぢらに告げん。然らず。爾曹悔改めずば、皆おなじく亡さるべし。

【路加傳第十三章自第一節至第三節】

二十一日

誰も自ら欺く勿れ。若しなんぢらの中に、この世に於て智慧ありと思ふ者あらば、智者とならん爲に愚かになるべし。

【哥林多前書第三章第十八節】

二十二日

爾曹犬を愼め、惡を行ふ者を愼め、割を行ふ者を愼め。

【腓立比書第三章自第一節至第三節】

二十三日

人律法を悉く守るとも、若しその一つに躓かば、これすべてを犯すなり。それ姦淫する勿れと言へる者、また殺すなかれと言はば、爾

曹姦淫せずとも、若し殺すことをせば律法を犯す者となるなり。なんぢら語ること、行ふこと、自由の律法によりて鞫を受けんとする者の如くすべし。

【雅各書第二章自第十節至第十二節】

二十四日

この石信ずるなんぢらには貴き物となり、信ぜざる者には工師に棄てられて、隅の親石となれる石となり、また躓く石、妨ぐる岩となるなり。彼等は詞を信ぜざるによりて之に躓く。こは彼等かく定められたるなり。

【彼得前書第二章自第七節至第八節】

二十五日

罪を犯す者は律法を犯す。罪とは卽ち律法を犯すことなり。

【約翰第一書第三章第四節】

二十六日

シロアムの塔たふれて壓殺されし十八人は、エルサレムに住めるすべての人々よりも勝りて罪ある者と思ふや。われなんぢらに告げん。然らず。なんぢら悔ひ改めずば、皆おなじく亡さるべし。

【路加傳第十三章自第四節至第五節】

二十七日

我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。我にありて總て實を結ばざ

る枝は父これを切り取り、すべて實を結ぶ枝は之を淸む。そは增々繁く實を結ばしめん爲なり。今なんぢら我言ひし詞によりて淸くなれり。なんぢら我にをれ。さらば我また爾曹にをらん。枝もし葡萄の樹に連らざれば、自ら實を結ぶこと能はず。爾曹も我に連らざれば、亦斯くの如くならん。我は葡萄の樹、なんぢらはその枝なり。人もし我に居り、われ亦かれにをらば 多くの實を結ぶべし。そは若し爾曹われを離るる時は、何事をもなし能はざればなり。人もし我にをらざれば、離れたる枝の如く、外に棄てられて枯るるなり。人これを集め、火に投入れて焚くべし。

【約翰傳第十五章自第一節至第六節】

二十八日

天國は麪酵の如し。女これをとり、三斗の粉の中に隠せば、悉く脹れいだすなり。

【馬太傳第十三章第三十三節】

二十九日

爾曹なにを願ふや。笞を以て我なんぢらに至ることを願ふ乎。はた愛と柔和の心を以て至ることを願ふ乎。

【哥林多前書第四章第二十一節】

三十日

愛する者よ、我なんぢらに勸む。なんぢらは旅人、また宿れる者なれば、靈魂に逆らひて戰ふ肉の慾を去るべし。

【彼得前書第二章第十一節】

三十一日

禍なるかな。彼等はカインの途にゆき、利の爲にバラムの迷謬に馳せ、またコラの逆ひし如くして亡びたり。彼等は爾曹の愛の筵席の磐なり。憚るところなく、共にその筵席に與りて自らを養へり。彼等は風に追はるる雨なき雲、枯れてまた根を拔かるる果のなき秋の樹、その穢を湧きいだす海の荒き浪、道をはなれたる星なり。之が爲に暗黑を限りなく留め置かれたり。

【猶太書自第十一節至第十三節】

六　月

六月

一日

天國は人畑に良き種を蒔くに似たり。人々の寢ねたるうちにその仇きたり、麥の中に稗子を播きて去れり。苗はえいでて實りたるとき稗子も現れたり。主人の下部きたりて言ひけるは、主よ、畑には良き種を蒔かざりしか。如何にして稗子あるか。下部に言ひけるは、仇人こ

れをなせり。下部主人に言ひけるは、然らば我儕ゆきて之を拔きあつむるは宜きか。否おそらくは爾曹稗子を拔きあつめんとて、麥をも共に拔くべし。收穫まで二つながら育て置け。我かりいれの時、まづ稗子を拔きあつめて焚かん爲に之を束ね、麥をば我が倉に收めよと刈る者に言はん。

【馬太傳第十三章自第二十四節至第三十節】

二日

愛する者よ、斯くの如く神われらを愛し給へば、我等も亦たがひに相愛すべし。未だ神を見し者なし、我等若したがひに相愛せば、神われらの衷にをりて、彼を愛する愛を我等の衷に全ふす。彼すでにその

靈をもて我等に賜ふ。これによりて我等の彼にをり、彼の我等にをることを知る。

【約翰第一書第四章自第十一節至第十三節】

三日

なんぢら自由なる者の如くせよ。されどその自由を以て惡を掩ふことなく、神の下部の如くすべし。

【彼得前書第二章第十六節】

四日

わが兄弟よ、爾曹のうちあるひは眞の道より迷へる者あらんに、誰か之を引返さば、この人知るべし。罪人をその迷へる道より引返すは、乃ちその靈魂を死より救ひ、かつ多くの罪を掩ふことを。

五日

それ神は亂の神にあらず、和平の神なり。

【雅各書第五章自第十九節至第二十節】

六日

されば我等たがひに審判すること勿れ。寧ろ兄弟の前に躓くもの、あるひは妨ぐるものを置かざらんことを定むべし。

【哥林多前書第十四章第三十三節】

七日

【羅馬書第十四章第十三節】

八日

良き種を蒔く者は人の子なり。畑はこの世界なり。良き種はこれ天國の子供なり。稗子は惡魔の子供等なり。之を蒔く仇は惡魔なり。收穫は世の終なり。刈る者は天の使達なり。稗子の斂めて火に焚かるる如く、この世の終に於ても、斯くの如くなるべし。人の子この使者たちを遣して、その國の中よりすべて躓礙となるもの、また惡をなす人を斂めて、之を爐の火に投入るべし。其所にて悲み、嚙がみすることあらん。この時正しき人は、その父の國に於て日の如く輝かん。

【馬太傳第十三章自第三十七節至第四十三節】

爾曹戰と戰の噂を聞くとき懼るる勿れ。それらの事はみなあるべきなり。然れども、終は未だ至らず。民は起りて民を攻め、國は國を攻め、またところどころに地震あり、饑饉、變亂あり。それらは苦難の始なり。

【馬可傳第十三章自第七節至第八節】

九日

イエス弟子を顧みてひそかに言ひけるは、爾曹が見るところの事を見るその目は幸なり。我なんぢらに告げん。多くの豫言者および王も、なんぢらが見るところの事を見んとせしかども見ず、なんぢらが聞くところの事を聞かんとせしかども聞かざりき。

十日

【路加傳第十章自第二十三節至第二十四節】

爾もし猶太人と稱へ、律法を恃み、神あるを誇り、その旨を知り、律法を習ひて善惡を辨へ、自ら瞽者の手引、暗黑にをる者の光、愚かなる者の師、童蒙の傅と思ひ、また律法に於て眞理と知るべき事との式を得たりとせば、何故人を敎へて自らを敎へざる乎。なんぢ人に竊む勿れと勸めて、自ら竊みする乎。なんぢ人に姦淫する勿れと諭して自ら姦淫する乎。なんぢ偶像を憎みて、自ら宮の物を犯す乎。なんぢ律法に誇りて自ら律法を犯し、神を輕しむる乎。

十一日

爾曹の中に姦淫ありと常に聞ゆ。その姦淫は異邦人の中にもあらざるほどの事にて、人その父の妻を持つと聞ゆ。なんぢら誇るか、かかる事を行ひし者の、なんぢらの中より黜けられんことを願ひて歎かざる乎。

【羅馬書第二章自第十七節至第二十三節】

十二日

酒に醉ふことなかれ。これをなすは放蕩なり。よろしく靈に滿さるべし。たがひに詩と、歌と、靈に感じて作れる賦とを以て語りあひ、

【哥林多前書第五章自第一節至第二節】

また歌ひて爾曹の心に主を讃美すべし。【以弗所書第五章自第十八節至第十九節】

十三日

爾この世の富める者に命ぜよ。驕ることなく、定めなき財を恃むことなく、唯われらを樂ませんとて、總ての物を豐かに賜ふ神を恃み、また善を行ひ、善き事に富み、惜みなく施濟をなして人と共にし、斯くして己の爲に善き基を蓄へ、未來の備へをなすべし。これまことの生を得ん爲なり。

【提摩太前書第六章自第十七節至第十九節】

十四日

わが兄弟よ、人自ら信仰ありと言ひて、若し行なくば何の益あら

んや。その信仰いかで彼を救ひ得んや。若し兄弟あるひは姉妹裸體にて、日用の糧に乏しからんに、爾曹のうちある人これに言ひて、安然にして往け。願はくば爾曹温かにして飽くことを得よと。而してその軀に無くてならぬ物を之に與へずば、何の益あらんや。斯くの如く、信仰若し行を兼ねざる時は、すなはち死ぬるなり。

【雅各書第二章自第十四節至第十七節】

十五日

愛の中に懼あることなし。全き愛は懼を除く。そは懼は苦みを持てり。おほよそ懼るる者は愛を全ふせざるなり。【約翰第一書第四章第十八節】

十六日

爾曹のうち誰かその子パンを求めんに石を與へんや。また魚を求めんに蛇を與へんや。さらば爾曹惡しき者ながら、善き賜をその子に與ふるを知る。まして天にいます爾曹が父は、求むる者に善き物を與へざらんや。

【馬太傳第七章自第九節至第十一節】

十七日

おほよそ自ら高ぶる者は下され、自らへりくだる者は高くせらるべし。

【路加傳第十四章第十一節】

十八日

律法は罪なるや。然らず。律法によらざれば、我が罪の罪たるを識ることなし。それ律法に貪る勿れと言はざれば、我貪慾の罪たるを識らざるなり。而して罪は誡の機に乘りて、わが中に樣々の貪慾を起せり。律法なければ、罪は死ぬるものなり。【羅馬書第七章自第七節至第八節】

十九日

知識は人をほこらしむ。されど愛は德を建つるものなり。若しみづから良くものを知ると思ふ者は、未だその知るべきほどをも知らざる者なり。

【哥林多前書第八章自第一節至第二節】

二十日

我儕は肉にありて歩けども肉に從ひて戰はず。それ我儕が戰の器は肉に屬するものにあらず。營壘を破るほど神によりて力あり。我儕は神の敎へに逆ひて建てたるところのすべての櫓と論を崩し、すべての思を擒にして、キリストに從はしむ。【哥林多後書第十章自第三節至第五節】

二十一日

されば主にありて囚人となれる我なんぢらに勸む。なんぢら召れし召にかなひて行はんことを、悉く謙遜と、柔和と、寛容なる心を以て行ひ、愛を以てたがひに忍び、平和といふ繫の中に、務めて靈の賜ふところの一なるを守るべし。

【以弗所書第四章自第一節至第三節】

二十二日

なんぢら人の義とせらるるは信仰にのみよるにあらず、行による
ことを知るなるべし。また妓婦ラハブ使者を受け、これを外の路より
去らしめて、義とせられたるは行によるにあらずや。身もし靈魂は
なるれば死ぬるごとく、信仰も行を離るれば死ぬるなり

【雅各書第二章自第二十四節至第二十六節】

二十三日

われら神を愛すと言ひてその兄弟を憎むは、これ僞人なり。既に
見るところの兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を如何で愛せんや。神

を愛する者亦その兄弟をも愛すべし。その誡は我儕彼より授けられ
たり。

【約翰第一書第四章自第二十節至第二十一節】

二十四日

なんぢ晝餉あるひは夕餉を設くるとき、友達、兄弟、親類、また富
める隣りの人を招くなかれ。恐らくは彼等また爾を招きてその報答を
なさん。なんぢ筵をなさば、貧しき者、癈疾者、跛者、瞽者などを
招け。さらばなんぢ幸なるべし。そは彼等は爾に報ゆること能はず
正しき人々の甦らんその時、なんぢに報答あればなり。

【路加傳第十四章自第十二節至第十四節】

二十五日

われなんぢらを愛する如く、なんぢらも亦たがひに愛すべし。これ我が誡なり。人その友の爲に己の命を棄つるは、これより大いなる愛はなし。

【約翰傳第十五章自第十二節至第十三節】

二十六日

また僞豫言者おほく起りて、多くの人を欺かん。また不法みつるによりて、多くの人の愛情ひややかになるべし。

【馬太傳第二十四章自第十一節至第十二節】

二十七日

爾曹正しからざる者の神の國を嗣ぐことを得ざるを知らざるか。爾曹みづから欺く勿れ。すべて淫を行ひ、または偶像を拜み、または姦淫をなし、または男娼となり、または男色を行ひ、または竊み、または貪り、または酒に醉ひ、または罵り、または奪ふ者などは、皆神の國を嗣ぐことを得ざるなり。

【哥林多前書第六章自第九節至第十節】

二十八日

今よりのち子供ならず、人の詭譎の手段と誘惑の巧に蕩漾さるることなく、樣々の敎へに動されず、愛をもて眞理を行ひ育てて、すべてのこと頭なるキリストに效はしめんためなり。彼を本とし、全體すべ

ての節々の助によりて連り、固り、その肢體おのおの分量に從ひ働きて、その軀を育て、みづから愛によりて德を建つるなり。

【以弗所書第四章自第十四節至第十六節】

二十九日

みづから譽むる者あり、我儕敢て之とならび、これと較ぶることをせず。されど彼等みづからたがひに度り、みづからたがひに較ぶれば、智なき者なり。我儕は量を踰えて誇らず。唯神われらに頒ち給ひしところの法の量に從ふ。われらこの量に從ひて爾曹にまで至れり。

【哥林多後書第十章自第十二節至第十三節】

三十日

なんぢ惡に勝たるる勿れ。善をもて惡に勝つべし。

【羅馬書第十二章第二十一節】

七　月

ルレユヂ　　彼と幼稚園

七月

一日

愛する者よ、爾曹わが主イエス・キリストの使徒達の曩に語りし言を思ひ起すべし。卽ち爾曹に語りていふ。末の時に嘲る者おこり、己が横逆なる慾に從ひて行かんと。彼等は自ら別をなす者、また肉につける者にして、靈のなき者なり。愛する者よ、爾曹その德をいと清き信

仰の上に建て、聖靈に感じて祈り、自らを守りて神の愛の中にをり、われらの主イエス・キリストの限りなき生を賜ふその矜恤を待つべし。彼等のうち、ある者をば論じて口を噤ましめ、ある者をば火より取り出して救ひ、ある者をば畏懼を以て憐むべし。その惡は肉の慾に染みたる衣までも憎むことをせよ。

【猶太書自第十七節至二十三節】

二日

我儕もし神を愛してその誡を守らば、これによりて我儕神の子供を愛すると知る。神の誡を守るは、是すなはち神を愛するなり。その誡は難からず。

【約翰傳第一書第五章自第二節至第三節】

三日

夫たる者よ、爾曹も妻をあつかふこと弱き器の如くし、理に從ひてこれと共にをり、これを救ふこと生命の惠を嗣ぐ者の如くすべし。是なんぢらの祈禱の阻礙なからん爲なり。

【彼得前書第三章第七節】

四日

なんぢ誰なれば隣を議するか。われら今日明日某の町に行き、かしこに一年とどまり、賣買して利を得んといふ者よ。なんぢら明日の事を知らず、なんぢらの生命は何ぞ。暫く現れて、遂に消ゆる霧なり。なんぢらの言ふことに替へて斯くいへ。主もし許し給はば、我儕生き

てあるひはこの事、あるひはかの事を爲さんと。されど今なんぢら驕りて誇ることをなす。すべて斯くの如きは惡なり。人善を行ふことを知りて、それを行はざるは罪なり。

【雅各書第四章自第十二節至第十七節】

五日

願くば爾曹少しく我が愚を容れよ。爾曹はもとより我を容るる者なり。われ神の熱心の如き熱心をもて爾曹を思ふ。我なんぢらを一人の夫に言付せり。これなんぢらを清き乙女としてキリストに獻げんとするなり。

【哥林多後書第十一章自第一節至第二節】

六日

爾もし食物のために兄弟を憂へしめば、その行ふところ愛の道に適はず。

【羅馬書第十四章第十五節】

七日

鹽は善き物なり。されど鹽その味を失はば、何をもて之に味をつけんや。田にも肥にも益なく、外に棄てらるるなり。

【路加傳第十四章自第三十四節至第三十五節】

八日

おほよそその妻を出して外の女を娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。また女もしその夫を出して外に嫁がば、その女も姦淫を行

ふなり。

【馬可傳第十章自第十一節至第十二節】

九日

天國は畑に隱れたる寶の如し。人みいださば之を匿し、喜び歸り、その持物を悉く賣りてその畑を買ふなり。また天國は良き眞珠を求めんとする商人の如し。一つの値たかき眞珠を見出さば、その持物を悉く賣りて之を買ふなり。また天國は海に打ちて樣々の魚をとる網の如し。既に盈つれば岸に曳上げ、坐りてその嘉きものを器に入れ、惡しきものを棄つるなり。

【馬太傳第十三章自第四十四節至第四十八節】

十日

おほよそ神によりて生るる者は世に勝つ。我等をして世に勝たしむるものは我等が信なり。誰かよく世に勝たん。

【約翰第一書第五章自第四節至第五節】

十一日

蛇の惡しきたくみにエバの惑されし如く、なんぢらの心損はれて、キリストに向ふの誠を離れんことを我等懼る。【哥林多後書第十一章第三節】

十二日

わが兄弟よ、爾曹榮の主なる我等の主イエス・キリストの信仰の道を守らんには、人を偏り視ること勿れ。もし人金の指輪をはめ、美し

き衣を着て爾曹の會堂に來り、また貧しき人、汚れたる衣を着て來らんに、爾曹美しき衣を着たる人を顧みて、爾この良き所に据われと言ひ、また貧しき者に、爾彼所に立てと言ひ、あるひは我が足下に据われと言はば、爾曹は各々のうち隔てを立て、また惡しき思ひを以て人を分つものにあらずや。我が愛する兄弟よ、聽け、神はこの世の貧しき者を選びて信仰に富ませ、己を愛する者に約束し給ひしところの國を嗣ぐべき者とならしめ給ふにあらずや。然るに爾曹貧しき者を卑しめたり。爾曹を虐げ、また裁判所に曳く者は富める者にあらずや。彼等は爾曹が稱へらるるところの良き名を讒するものにあらずや。爾曹

もし聖書に載するところの、己の如く爾の隣を愛すべしと云へる貴き掟を守らば、その行ふところ善し。されど若し人を偏り視ることをせば、これ罪を行ふなり。法律なんぢらを定めて罪人とせん。

【雅各書第二章自第一節至第九節】

十三日

されば我等強き者は、強からざる者の懦弱を負ひて、己の心に喜ばざるをも爲すべきなり。我等おのおの隣の德を建てんために、善をもて之を喜ばすべし。

十四日

【羅馬書第十五章自第一節至第二節】

天地の廢るは、律法の一畫の廢るよりも易し。

【路加傳第十六章第十七節】

十五日

愛は忍ぶことをなし、また人の益を圖るなり。愛は妬まず、誇らず たかぶらず、非禮を行はず、己の利を求めず、輕々しく怒らず、人の惡しきを思はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、おほよそ事包み、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事忍ぶなり。愛はいつまでも墮つることなし。されど豫言は廢り、方言は息み、知識も亦廢らん。我等の知識全からず、豫言も全からず、全き者きたるときは、全からざる者廢るべし。

【哥林多前書第十三章自第四節至第十節】

十六日

兄弟よ、なんぢら喜び、且全くなり、且慰め、且心を同じうし、且和ぐことをせよ。然らば愛と平安の神なんぢらと偕にあらん。なんぢら聖き接吻をもて互に相問ふべし。すべての聖徒なんぢらに安きを問へり。

【哥林多後書第十三章自第十一節至第十三節】

十七日

イエス彼に言ひけるは、全からん事を思はば、往きてなんぢが持物を賣りて、貧しき者に施せ。さすれば天に於て寶あらん。

十八日

姦悪なるこの世に於て我とわが詞を恥づる者をば人の子も亦聖き使と共に父の榮光をもて來る時之を恥づへし。

【馬太傳第十九章第二十一節】

【馬可傳第八章第三十八節】

十九日

この言を言へる時、群集の中よりある女聲を揚げて言ひけるは、爾を孕みし腹と、爾の哺ひし乳は幸なり。イエス答へけるは、然り、されど神の詞を聽きて、それを守る者の幸にはしかず。

【路加傳第十一章自第二十七節至第二十八節】

二十日

我等が救ひを得るは望によれり。されど望を見ば、亦望なし。既に見るところのものは、如何で猶これを望まんや。若しわれら未だ見ざるものを望まば、忍んでこれを待つべし。

【羅馬書第八章自第二十四節至第二十五節】

二十一日

それ神の愚かは人よりも慧く、神の弱きは人よりも強し。兄弟よ、召を蒙れるなんぢらを觀よ。肉によれる智慧あるもの多からず、力ある者おほからず、貴き者多からざるなり。神は智者を愧しめんとて、

世の愚なる者を選び、強き者を愧しめんとて、世の弱き者を選ぶ。

【哥林多前書第一章自第二十五節至第二十七節】

二十二日

なんぢら不信者と耦ふなかれ。そは義と不義と何の侶なることかあらん。光と暗きと何の交ることかあらん。

【哥林多後書第六章第十四節】

二十三日

なんぢら愛せらるる子供の如く、神に倣ふべし。また愛を以て行ひ、キリストの我等を愛し、我等に代りて己を供物となし、犧牲となして、神の前に馨しき香あらしめんとて獻げ給ひしが如くすべし。

二十四日

なんぢら全く、且備はりて缺くる所なからんために、忍耐をして全く働かしめよ。なんぢらの内もし智慧足らざる者あらば、かの咎むることなく、惜むことなくして、總ての人に與ふる神に求めよ。さらば與へられん。されど疑ふことなく、信じて之を求むべし。疑ふ者は風に動かされて飜る海の浪の如し。斯くの如き人は、主より何物をも受くると想ふ勿れ。斯くの如き人は、二心にして、その行ふところの事すべて定準なし。卑き兄弟は、その高くせらるる事を喜樂とせよ。

【以弗所書第五章自第一節至第二節】

二十五日

【雅各書第一章自第四節至第九節】

爾曹の衷にある望の緣由を問ふ人には、柔和と、畏懼を以て答へを
なさんことを恒に備へよ。かつ答ふる時は、善き良心に從ふべし。こ
れ爾曹を惡を行ふ者と誣ひ、爾曹がキリストにあつて、行ふ善き行
を誘る者の自ら愧ぢん爲めなり。若し爾曹が善を行ふによりて苦みを
受くること神の心ならば、惡を行ふによりて苦みを受くるに勝れり。

二十六日

【彼得前書第三章自第十五節至第十七節】

なんぢら勤めて信仰に德を加へ、德に智識を加へ、智識に撙節を加
へ、撙節に忍耐を加へ、忍耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の睦を加へ、
兄弟の睦に愛を加ふべし。

【彼得後書第一章自第五節至第七節】

二十七日

明日の事を思ひ煩ふなかれ。明日は明日の事を思ひ煩へ。一日の苦
勞は一日にて足れり。

【馬太傳第六章第三十四節】

二十八日

爾曹その肢體を獻げて、汚穢と惡の僕となり、惡に至りし如く、今
またその肢體をささげて義の僕となりて、聖潔に至るべし。そは爾曹

罪の僕なりし時には、義に事へざればなり。爾曹いま恥づるところのことを行ひしその時、何の實を得たりしや。これらのことの果は死なり。

【羅馬書第六節自第十九節至第二十一節】

二十九日

なんぢら知らざるか。聖き事を務むる者は宮の物を食し、祭壇に事ふる者は祭壇と共にその頒ちを取ることを。斯くの如く主福音を宣べ傳ふる者は、福音によりて過さんことを定め給へり。

【哥林多前書第九章自第十三節至第十四節】

三十日

それ尠く蒔く者は尠く穫り、おほく蒔く者は多く穫るべし。

【哥林多後書第九章第六節】

三十一日

愛する者よ、惡に效ふ勿れ。卽ち善に效へ。善を行ふ者は神より出で、惡を行ふ者は未だ神を見ざるなり。

【約翰第三書第十一節】

八　月

八月

八月

一日　身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るる勿れ。唯なんぢら魂と軀とを地獄に滅し得る者を懼れよ。

二日　【馬太傳第十章第二十八節】

おほよそ我を信ずる小さき者の一人を躓かする者は、その首に挽臼を懸けられて、海に投げ入れられん方、其人の爲になほ善かるべし。

【馬可傳第九章第四十二節】

三日

爾曹パリサイの人の麪酵を謹めよ。これ僞善なり。それ掩はれて露れざるものはなく、隱れて知れざるものはなし。その故に、なんぢら幽暗に語りしことは、光明に聞ゆべし。ひそかなる部屋にて耳に附言ひしことは、屋の上にひろがるべし。

【路加傳第十二章自第一節至第三節】

四日

兄弟よ、我いま律法を知れる者に言はん。律法は人の生命の限りその主たるを知らざる乎。夫ある女は律法の爲に夫の生けるあひだは、それに繫がるれど、夫死なば、その律法より釋さる。されば、夫の生けるうちに、外の人に行かば、淫婦と稱ふべし。若し夫死なば、その律法より釋さるるが故に、人に行くとも淫婦にはあらず。然れば、我が兄弟よ、なんぢらもキリストの身によりて律法について殺されしものなり。

【羅馬書第七章自第一節至第三節】

五日

爾曹の誘るは宜ろしからず。少しの麪酵その塊をみな脹らすを知し

らざる乎。なんぢらは麪酵なきが如き者なれば、古き麪酵を除きて、新しき塊となるべし。それ我等の逾越、すなはちキリストは、既にほふられ給へり。されば我等古き麪酵を用ゐず、また惡しきと、暴戾の麪酵を用ゐず、眞實と誠なる、種無き麪酵を用ゐて節を守るべし。

【哥林多前書第五章自第六節至第八節】

六日

肉と靈のすべての汚れを去りて自らを清くし、神を恐れて清きことを成就すべし。

【哥林多後書第七章第一節】

七日

爾曹今よりのち異邦人の如く、その心のよこしまなるに任せて行ふべからず。かれら心昏き者なり。また知るところ無きにより、かたくなるによりて神の生に遠ざかれり。彼等は恥を知らず。好みて總ての汚を行はん爲に己を放蕩にわたせり。されど爾曹は斯くの如く行はん爲にキリストを學べるにあらず。爾曹かれに聞き、かれの敎を受けて、イエスにある眞理を知りしならん。なんぢら先に習へる古き人、すなはち人を惑はす慾のために破らるるものを脫ぎ、また爾曹の心の靈を新にし、神に象りて眞理の正しきと、清きにて造れる、新しき人を着るべし。斯くて謊言を棄て、おのおのその隣に眞を言ふべし。そ

はわれら互に肢なればなり。　【以弗所書第四章自第十七節至第二十五節】

八日

それ人は心に信じて義とせられ、口に言ひ顯して救はるるなり。　【羅馬書第十章第十節】

九日

なんぢら主の杯と、惡鬼の杯とを兼ね飲むこと能はず。主の筵と、惡鬼の筵とに兼ねつかふる能はず。　【哥林多前書第十章第二十一節】

十日

爾曹諸〳〵の事、すなはち信仰と、詞と、知識と、すべての勉勵、および我等に向ふ愛心に富める如く、その惠にも富むべし。我かく言ふは、爾曹に命ずるにあらず。されど、外の人勵むによりてなり。また爾曹の愛の眞を試みんが爲なり。　【哥林多後書第八章自第七節至第八節】

十一日

なんぢ年若きを以て人に輕んぜらるる勿れ。詞と、行と、愛と、信と、清きを以て信者の範となるべし。　【提摩太前書第四章第十二節】

十二日

主の僕は爭ふべからず。やはらかに總ての人をあしらひ、敎へをよくし、忍ぶことをなし、逆らふ者をば柔和を以て戒むべし。神あるひ

は彼等に悔ひ改むる心を賜ひて、之に眞理を識らしめ給はん。また彼等その醉さめて、惡魔の罟を脱れいでん。そは惡魔彼等をして、己が旨を行はしめん爲に之を擒にすればなり。

【提摩太後書第二章自第二十四節至第二十六節】

十三日

二羽の雀は一錢にて售るにあらずや。然るになんぢらの父の許なくばその一羽も地に隕つることあらじ。

【馬太傳第十章第二十九節】

十四日

爾曹もなほ悟らざるか。おほよそ外より人に入るるもの、人を汚し

能はざることを知らざる乎。そはその心に入らず、腹に入りて厠に落つ。すなはち食ふところのもの清まれり。又言いけるは、人より出づるものは、これ人を汚す。人の心より出づるものは、惡念、姦淫、苟合、兇殺、盜竊、貪婪、惡慝、詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄なり。これらの惡しきことは、みな内より出でて人を汚すものなり。

【馬可傳第七章自第十八節至第二十三節】

十五日

爾曹パリサイの人、椀と皿の外を清くす。されど爾曹うちは貪慾と惡にて滿てり。愚なる者よ、外を造りし者は、また内をも造らざりし

や。

【路加傳第十一章自第三十九節至第四十節】

十六日

愛は僞ること勿れ。惡は憎み、善は親み、兄弟の愛をもてたがひに愛し、禮儀を以て相讓り、勤めて惰らず、心を熱くして主に仕へ、望みて喜び、患難に耐へ、祈を恒にし、聖徒の乏しきを賑はし、旅人を懇にせよ。

【羅馬書第十二章自第九節至第十三節】

十七日

それ十字架の敎は、滅ぶる者には愚なるもの、我等救はるる者には神の力たるなり。卽ち記して、我智者の智を滅し、慧き者の慧きを空

しくせんとあるが如し。

【哥林多前書第一章自第十八節至第十九節】

十八日

キリストとベリアルと何の合ふことかあらん。信者と不信者と何の干ることかあらん。神の宮と偶像と何の同じきことかあらん。それ爾曹は活ける神の宮なり。神嘗て、我かれらの中に宿り、また歩まん。我かれらの神となり、彼等わが民とならんと言ひ給ひしが如く、また爾曹彼等の中より出でてこれを離れ、汚穢に捫ることを勿れ。

【哥林多後書第六章自第十五節至第十七節】

十九日

神の旨は、なんぢらの清きこと、卽ち姦淫をせず、各己の器を得て、これを清く、貴くなして用ふることを知り、神の知らざる異邦人の如く、情慾をほしいままにせず、またこの事について兄弟を欺き、かつ害せざらんことを求め給ふ。【帖撒羅尼迦前書第四章自第三節至第六節】

二十日

年寄を責むること勿れ。是を父の如くし、若き者を兄弟の如くし、老いたる女を母の如くして勸め、また若き女を姉妹の如くし、これを勸むるに貞潔を盡すべし。【提摩太前書第五章自第一節至第二節】

二十一日

なんぢ義を愛し、惡を憎む。これ故に神、すなはち爾の神は、喜の膏を以て、爾の侶よりも勝りて爾に沃げり。【希伯來書第一章第九節】

二十二日

なんぢら互に過を言ひ顯し、且病を癒さるることを得ん爲に互に祈るべし。正しき人の篤き祈禱は力あるものなり。【雅各書第五章第十六節】

二十三日

もし人その兄弟の死に至らざる罪を犯すを見ば、祈りて死に至らざる罪を犯す者に生を與ふべし。死に至る罪あり。われ是がために祈れ

と言はず。總ての不義は罪なり。されど死に至らざる罪あり。

【約翰第一書第五章自第十六節自第十七節】

二十四日

我この世を何に譬へんや。童巷に坐し、その侶を呼びて、われら笛ふけども爾曹踊らず、悲みをすれども爾曹胸うたずと云ふに似たり。

【馬太傳第十一章自第十六節至第十七節】

二十五日

人々とその弟子を共に呼びて彼等に云ひけるは、若し我に從はんと思ふ者は、己を棄て、その十字架を負ひて我に從へ。そは生命を全ふ

せんとする者は之を失ひ、我ため、また福音のために生命を失ふ者は、これを得べければなり。

【馬可傳第八章自第三十四節至第三十五節】

二十六日

イエス言ひけるは、爾曹も禍なるかな。敎法師よ、堪へがたき荷を人に負はせ、自ら指一つをもその荷に付けず。

【路加傳第十一章第四十五節】

二十七日

爾曹は肉によりて人を捌く。我は人を捌かず。

【約翰傳第八章第十五節】

二十八日

爾曹を害ふ者を祝し、これを祝して詛ふべからず。喜ぶ者と共に喜び、悲む者と共に悲むべし。あひたがひに心を同じうし、高き思ひをなさず、かへりて低きにつけよ。また自らを慧しとする勿れ。惡をもて惡に報ゆる勿れ。人々の善しとするところを心に留めて之をなし、爲し得べきところは力を盡して人々と睦み親むべし。

【羅馬書第十二章自第十四節至第十八節】

二十九日

智者いづくにある。學者いづくにある。此世の論者いづくにある。神はこの世の智慧をして愚かならしむるにあらずや。世人は己の智慧

を恃みて神を知らず。これ神の智慧に適へるなり。この故に神は傳道の愚かなるを以て、信ずる者を救ふを善しとせり。

【哥林多前書自第二十節至第二十一節】

三十日

神を敬ひて足ることを知るは大いなる利なり。われら何をも携へて世に來らず、また何をも携へて往くこと能はざるは明かなり。

【提摩太前書自第六節至第七節】

三十一日

我なんぢの涙を思うて爾を見んことを願ふ。これ歡喜を我に滿しめ

んためなり。我なんぢの僞なき信仰を思ふ。斯くの如き信仰、前になんぢの祖母ロイス、またなんぢの母ユニケにあり。今なんぢにもあることを信ずるなり。この故に、我なんぢをして我が按手によりて、なんぢが受けし神の賜物を再び盛にせんことを思はしむ。そは神の我等に賜へる靈は、臆する靈にあらず、力と、愛と、謹の靈なればなり。

【提摩太後書第一章自第四節至第七節】

九月

九月

一日

なんぢら禍なるかな、敎法師よ。智識の鑰を取りて自ら入らず。且入らんとする者をも拒めり。

【路加傳第十一章第五十二節】

二日

われ新しき誡をなんぢらに與ふ。卽ちなんぢら相愛すべしとの是なり。我なんぢらを愛する如く、なんぢらも相愛すべし。

【約翰傳第十三章第三十四節】

三日

天國は燈を執りて花婿を迎へに出づる十人の娘になぞらふべし。その中五人は賢く、五人は愚なり。愚なる者は、その燈をとるに油を携へざりしが、賢き者はその燈とともに油を器に携へたり。花婿遲かりければ、皆假寢して眠れり。夜なかばに、叫びて、花婿來りぬ。出でて迎へよと叫ぶ聲ありければ、この娘ども皆起きてその燈を

整へたるに、愚なる者、賢き者に言ひけるは、我等の燈消えんとす。願くば、なんぢらの油を我等に分け與へよ。賢き者答へて言ひけるは、我等となんぢとに恐らくは足るまじ、なんぢら賣る者に往きて、己がために買へ。彼女等買はんとて往きしとき、花婿きたりければ、既に備へたる者は、これと偕に婚筵に入りしかば、門は閉ぢられたり。斯くて後、その外の娘きたりて言ひけるは、主よ、我等のために開きたまへ。答へて我まことに告げん。我は爾曹を知らずと言へり。されば怠らずして守れ。なんぢらその日その時を知らざればなり。

【馬太傳第二十五章自第一節至第十三節】

四日

視よ、我なんぢらに奥儀を告げん。我等悉く眠るにはあらず。我等皆をはりの瓠の鳴らんとき、忽ち瞬く間に化せん。そは瓠ならんとき、死にし人よみがへりて朽ず、我等もまた化すべければなり。

【哥林多前書第十五章自第五十一節至第五十二節】

五日

すべて我が愛する者は、我これをいましめ、これを懲す。この故になんぢは勵みて悔改めよ。

【約翰默示錄第三章第十九節】

六日

不義を行ふ者はまたその不義の報を受く。主は偏り視たまふことなし。

【哥羅西書第三章第二十五節】

七日

妄なる、益なき話を避くべし。そは是をなす者ますます不信に進めばなり。彼等の詞は脫疽の如く、腐れひろがるべし。

【提摩太後書第二章自第十六節至第十七節】

八日

肉體の父は、その心に任せて暫く我等を懲しむ。されど靈魂の父は我等に益を得せしめて、その聖潔にあづからせんがため、懲しむるこ

とをなす。すべての懲治今は喜ばしからず。却つて悲しと思はる。されど後これによりて鍛錬する者には、義の穩かなる果を結ばせり。この故になんぢら疲へたる手、弱りたる膝をすこやかにせよ。足蹇へたる者の迷ふことなく痊されんがため、なんぢらの足に直なる徑を備ふべし。

【希伯來書第十二章自第十節至第十三節】

九日

人は二人の主に仕ふること能はず。そはこれを憎み、彼を愛み、是を親しみ、彼を疎むべければなり。

【馬太傳第六章第二十四節】

十日

若し人全世界を得るとも、その生命を失はば、何の益あらんや。また人何をもてその生命に易へんや。

【馬可傳第八章自第三十六節至第三十七節】

十一日

禍なるかな、なんぢらパリサイの人よ。食堂の高座、町の挨拶を好めり。禍なるかな、それなんぢらは隱れたる墓の如し。その上を歩く人々これを知らざるなり。

【路加傳第十一章自第四十三節至第四十四節】

十二日

罪の定るゆゑは、光世に來りしに、人その行の惡しきによりて光を愛せず、却つて暗きを愛すればなり。

【約翰傳第三章第十九節】

十三日

わが愛する者よ、その仇を報ゆること勿れ。退きて主の怒を待て。そは記して主の言ひ給ひけるは、仇を返すは我にあり、我かならず之を報ひんとあればなり。是故に、なんぢの仇もし飢ゑなば、之を食はせ。若し渴かば之を飲せよ。なんぢ斯くするは、熱き火を彼の首に積むなり。

【羅馬書第十二章自第十九節至第二十節】

十四日

されどなんぢら愼みて、その自由を弱き者の躓きとなすなかれ。

【哥林多前書第八章第九節】

十五日

神はなんぢらをして、常に總ての物に足らざることなく、すべての善き業を多く行はしめんために、すべての惠を多くなんぢらに與へ得るなり。

【哥林多後書第九章第八節】

十六日

イエス・キリスト我等を解きて自由を得させたり。その故になんぢら堅く立ちて、再び奴隷の軛に繫がるるなかれ。

【加拉太書第五章第一節】

十七日

神は愆と罪に死しところの爾曹をも生し給へり。爾曹嘗てこの世の

風俗に従ひ、かの愆と罪を行ひて日を送り、亦空中にある諸權をすべてつかさどる者、すなはち信じ従はざる者の中に今はたらく所の靈に従へり。我等もみな嘗てその中にをり、肉の慾に従ひて日を送り、肉と心の思ふままをなし、外の人の如く、生れながらにして怒の子なりき。然るに矜恤に富める神、われらを愛するところの大いなる愛により、罪に死し時にすら、我等をキリストと偕に生し、(なんぢら惠によりて救はれしなり)またイエス・キリストにある我等を彼と偕によみがへらせ、共に天の處に坐せしめ給へり。【以弗所書第二章自第一節至第六節】

十八日

すべてのこと考へてその善きものを守り、もろもろの惡しき事の類に遠かるべし。【帖撒羅尼迦前書第五章自第二十一節至第二十二節】

十九日

人みづから驕り、無知にして、議論と詞の爭を好む。これにより て娼嫉、爭鬪、毀謗、妄疑、またよこしまにして眞理を離れ、神を敬ひて利を得んと思ふ人の爭論起るなり。なんぢら斯くの如き人に遠かるべし。【提摩太前書第六章自第四節至第五節】

二十日

なんぢら心を剛愎にする勿れ。【希伯來書第三章第八節】

二十一日

愛する者よ、なんぢらを試むる火の如き苦しみを、常ならぬ事の如くして、なんぢら怪しとする勿れ。却つてキリストの苦しみにあづかるを以て歡樂とすべし。さればその榮の顯れん時、またなんぢら喜び躍らん。

【彼得前書第四章自第十二節至第十三節】

二十二日

クリアよ、我いま爾に勸む。互に相愛すべし。こは新しき誡を書き贈るにあらず。すなはち始より我等が持てる處のものなり。我等彼の誡に從ひてあゆむは、是すなはち愛なり。なんぢらが始より聞き

し如く、愛にあゆむは是すなはち誡なり。

【約翰第二書自第五節至第六節】

二十三日

我を呼びて、主よ主よと言ふもの、悉く天國に入るにあらず。唯これに入る者は、我が天にいます父の旨に從ふ者のみなり。

【馬太傳第七章第二十一節】

二十四日

噫エルサレムよ、エルサレムよ。預言者を殺し、爾に遣はされし者を石にて擊てる者よ。牝鷄の雛を翼の下に集むる如く、我なんぢの子供を集めんとせしこと幾度ぞや。なんぢらは好まず。視よ、なんぢら

の家は墟となりて遺さるべし。まことに我なんぢらに告げん。主の名によりて來るものはさいはひなりと爾曹言はん時至るまでは、我を見ざるべし。

【路加傳第十三章自第三十四節至第三十五節】

二十五日

すべて惡をなす者は光を憎み、その行ひを責められざらんが爲に光に來らず。

【約翰傳第三章第二十節】

二十六日

すべてのこと正しく、且つ次序に從ひて行ふべし。

【哥林多前書第十四章第四十節】

二十七日

また若き者に勸む。なんぢら長老に從へ。且たがひに皆相從ひて謙遜を着よ。それ神は驕る者を拒ぎて、へりくだる者に惠を與へ給ふなり。この故になんぢら神の大能の手の下に己を卑くすべし。時至らば、彼なんぢらを高くせん。

【彼得前書第五章自第五節至第六節】

二十八日

キリストの詞をして爾曹の心をとめて滿ち足らしめ、總ての智慧により、詩と、歌と、靈に感じて作れる賦とを以てたがひに相敎へ、相勸め、惠に感じて心の中に神を讃美すべし。

【哥羅西書第三章第十六節】

二十九日

惡しき人と、人を欺く人は、益々惡に進み、人を惑し、また人に惑さる。

【提摩太後書第三章第十三節】

三十日

なんぢら世を渡るに貪ることをせず、あるところを以て足れりとせよ。

【希伯來書第十三章第五節】

十月